落　第　始　末　記

冨　田　惣　七

中学4年（昭和2年）のときに病気で落第しました。二度目の4年のときの担任が堀先生でした。

そのときは，もうからだはだいぶんよくなっていましたから，あとは成績だけということでしたが，それが文字通り心細いもので堀先生には大変なご心配をおかけしました。

というのは，どこでもそうかも知れませんが，当時の福井中学校でも，2年つづけて留年すると退学になるという事だったからであります。

私は病気で寝ている間に，手あたり次第に本を読みました。有島武郎に熱中しました。そしてホイットマンを読みあさりました。白樺派の作家たちのものも誰彼かまわずに乱読しました。その上白秋の短歌にも夢中になりましたし，ファーブルの昆虫記なども全巻をくり返して読んだりしました。

こういうものに心が燃えているときは，学校のことなどは何かさくばくとしたものに見えます。ですから学習への意欲などさっぱりおきてきません。

齢からいえば，今の高等学校の2年生位に当りますけれども，当時の中学生は，漫画しか分らない今の高校生に比べると比較にならない位の大人でしたから，私もまたその頃の風潮なみに人道主義者であると共に，ある種の清教徒ふうの人生観みたいなものをもっていましたので，だからそういう自分の中へ，とにかくも二度つづけて落第しない程度に勉強するという便ぎな理屈をもってきて自分を納得させるのは，なかなか骨の折れることでした。

堀先生は私に，弁当は教室で食べずに，博物の準備室で食べなさいと言われました。あるいはそれは標本室と呼ばれていたのかも知れませんが，それが学校のどの辺りにあったのか今眼をつぶってもさっぱり思い出せませんが，とにかくその室の一部には博物の先生の机が三つほどあって，そこに堀先生が居られました。

病後の私の弁当は，パンにバター（当時としてはこれでなかなか栄養のあるものと信じられていました）だったので，それを焼いたり，牛乳をあたためたりするのには火鉢があって大変重宝でしたが，なんといっても，目の前には先生が居られるし，その先生が〝どうや勉強〟そして又ある日は〝古屋先生がおまえの作文をとてもほめていられたぞ〟なんて具合に，何やらちょいちょいと，ひとことずつ毎日話しかけられるのには閉口しました。

しかしおそらくは，この堀先生のお心づかいがなかったら，私はまたぞろ落第して，ついには学校に居られなくなって，そのためにそれからあとの私の生き方は相当違ったものになっていただろうと思います。

そこで私が今も思い出しては，心の中で先生にお礼を言っているのは，その毎日の先生のお話しぶりです。

それはぐいぐいと押してくるような，そんな話し方では決してありませんでした。

さりげなくぽつりと一言。くどくど言わず。話しのついでに。そういった具合の話し方でした。

特に，そばに居られるほかの先生に気がねされるようなそぶりで小声で静かに。それが私には一番こたえました。

そしてそれも一日か，たまにはというのでしたら私の気持ちは動かなかったかも知れませんが，しかしそれは絶対に終ることなく，途ぎれることなく，一年を通じてずーっと毎日続いたのです。

ですから，だんだんと，じわじわと，私の心は動かざるを得ませんでした。

私は降参して，すこし勉強するようになりました。

一学期の成績の様子では，今度もだめかと思われましたが，日が経つにつれ，私の心が動いていくにつれて，成績もあがりとうとう二学期の成績はみんなが驚く程になりました。

この絶妙な指導の仕ぶりは，教育というのはこうしてやるんだ，とずばり示した様なものです。

教育というものは持久戦です。しかし持久戦にもいろいろあります。張りきるというのではなく，ゆっくりと，たわんでいるように見えてその実急所にくるとそのたわみが見事に生きて働く。そういう，たくみな，せかずさわがずの戦法，そういうものは余程練達の人でないと，うまくやれるものではありません。

教育の仕事をするものは，みんながそうしたいと願うでしょう。しかし借りものでない，無理のない自然なやり方でやれるのは容易なわざではありません。

まして，その場所を（ほかの先生が居られるので，そっと言わねばならんのだ，というひときわ身にしみるそういう場所を）ちゃんと用意されたという事は洵に驚嘆のかぎりであります。

私は何時もその事を思い，堀先生の見事な攻撃ぶりに，おのずから自分の頬に微笑が浮かんでくるのを感じます。そしてその笑いが〝ありがたかったなアー〟という言葉になって私の眼を熱くするのです。

（福井高等学校）